

国際規格の FD 戦略
淑明女子大学訪問調査報告
(2009 年 3 月)

調査派遣者：

三浦 徹 (副学長、教育機構長)

香西みどり (人間文化創成科学研究科教授、食物科学)

曹 基哲 (人間文化創成科学研究科准教授、物理学)

調査日程：2009 年 3 月 20 日 (予備調査 2008 年 8 月)

報告書作成・掲載：2009 年 6 月 15 日

< 報告 1 >

三浦 徹 (文教育学部グローバル文化学環、前副学長)

淑明女子大学は、1906 年に韓国皇室によって設立された女子大学で、100 周年をへたいま、“Gentle Power to Change the World”をスローガンに掲げ、さまざまな取り組みを進めている。お茶の水女子大学とは、2000 年に交流協定を締結し、淑明女子大学からは毎年交換留学あるいは日本文化研修プログラムでの留学生を迎えている。また、2007 年度から、淑明女子大学では、夏期の英語による Korean Studies Program を開始し、お茶大からこれに参加する学生もいる。訪問調査は、2008 年 8 月に三浦および森山新准教授が予備調査 (資料入手と打合せ) をおこない、09 年 3 月に 3 名の教員が訪問した。

1. 大学の概要

9 の学部 college (人文、理学、人間・環境、社会科学、法、経済経営、音楽、薬学、芸術) と 13 の大学院研究科、2 つのセンター (グローバル・リーダーシップ、コミュニケーション開発)、附属施設 (図書館、博物館、語学教育など) をもち、学生数は 13000 名 (学部、大学院、学部の入学定員は 1 学年 2300 名)、21 カ国 128 の大学機関と交流協定を結んでいる。

大学の広報パンフレットに、現在における大学の使命をつぎのように述べている。

「女性教育、国家の救済と国民への献身を追求し、淑明の光はいま、世界平和と人類の進歩を照らし出す。1906 年、日韓保護条約が締結され国家が危機に直面したその翌年に、皇室は教育をつうじた能力と技術の向上こそが、国家を救う唯一の道であると確信し、最初的女子大学を設立した。・・・21 世紀を迎え、淑明女子大学は、リーダーシップを核とした leadership-oriented 世界の最初の大学となることに邁進する。」



写真1 百周年記念館からみた淑明キャンパス

2. 教育課程とカリキュラム

2.1 卒業必要単位

- ・総単位 薬学部をのぞき 140 単位（1 時間の講義 x 15 回が 1 単位、お茶大と同じ）。
- ・リベラルアーツ（教養教育科目）は必修科目 14 単位（リーダーシップ 4、プレゼンテーション 2、ライティング 2、英語 6）、選択科目 18 単位（人文、社会、自然、芸術、女性と生活文化、外国語の 6 つのカテゴリーから最低 1 科目以上）など、計 34 単位。
- ・専攻科目（専門教育） 学部・学科（専攻）によって異なり、人文・社会系は 42 単位、生活・理学系が 54 単位、コンピュータ情報科学と舞踊・芸術系が 70-78 単位。必修科目は、情報・芸術系以外では設けられていない。これは、ダブルメジャーが履修できるようにするための措置と考えられる。

2.2 専攻制度

学生は、入学時にいずれかの学部に入學する（入試では、学部・学科ごとの上限人数のみがあり、専攻ごとの定員はもうけられてない）。入学後、第 2 から第 5 セメスター（3 年前期）までのあいだに、主専攻（第一メジャー）を申請する（転学部については入学試験のスコアの範囲内で許可される）。

副専攻については、ダブルメジャー、メジャー&マイナー、深化メジャー Major Concentrated の 3 つの履修タイプがある。ダブルメジャーの場合は、学位記に該当する複数の学位が記される（歴史と物理学の例が掲載されている）。マイナーの場合は 30 単位で取得できる。深化メジャーの場合は、通常メジャーが 42-54 単位であるのに対し、60-66 単位が必要とされる。卒業生の専攻の状況は、ダブルメジャー 47%、メジャー&マイナー 17%、深化メジャー 36% であり、ダブルメジャーが約半数を占めている。

メジャーのなかで人気が高いトップ 5 は、①経営②英語英文学③経済④コミュニケーション・広告⑤マスメディア、とのことである。

成績評価は、4 段階（A,B,C,D、D グレードまで単位認定）で、各グレードはさらに 3 段階に細分化され、GPA ポイント（最低 0.7、最高 4.3 の 12 段階）が定められている。1 セメスターに履修できる単位数は 21 単位が上限で、年間でも 39 単位までとされている。年間 35 単位が履修の標準とされている。

3. 訪問スケジュール

- 3.1 グローバル・リーダーシップ研究所
- 3.2 人間・環境学部食物栄養専攻、韓国食物研究所
- 3.3 理学部物理学専攻
- 3.4 大学図書館

4. グローバル・リーダーシップ研究所 Global Leadership Institute

この研究所（略称は SGLI）は、百周年記念館におかれ、1 階のロビーでは、リーダーシップ・プログラムの概要を説明した展示があり、館内には、授業用の教室や会議室、図書館といった設備も整っている。Chang Yunkeum 所長に面会し、説明をうけたのち、館内の諸施設を案内いただいた。

グローバル・リーダーシップ研究所は、「しなやかな力が世界を変える」のモットーに、「21 世紀の情報社会における創造的で専門的なグローバル・リーダーを育成することを目ざして 2002 年に設立された。2004 年から 5 年間にわたり、韓国文部科学省のリーダーシップ・プログラムに選定され年 17 億ウォンの助成金をえている。所長以下、研究所専任の教員が 5 名と職員 3 名がおかれ、授業担当では各学部の教員も参画している。

リベラルアーツ（教養科目）では、新入生全員が「リーダーシップ」科目を必修科目として履修する。300-400 名規模の講義科目（リーダーシップの概念、ロールモデルなど）と 30 名規模のグループワーク（お茶大の礎ゼミにあたる）の 2 種類のメニューが用意されている。企業や官庁のトップなどによるゲスト講義やキャンプなども盛り込まれている。

施設を見学してなによりもうらやましかったことは、高層の百周年記念館全体が、このリーダーシップ研究所とプログラムのために使用されていることである。1 階のロビーでは、韓国の歴史上のリーダーのプロフィールに始まり、プログラムの概要とともに、学生たちの声が展示されている。教室の廊下には、学生がこのプログラムのなかで作成した「私の抱負」やら「2020 年の私の名刺」などが掲示され、プログラムに接することができる。寄付者の名を冠した立派な会議場も印象的だった。また、記念館の 1 階は、大学の歴史館となっていて、100 年の歴史を一望することができる。お茶大にも歴史資料室ができたが、常時開館ではない。いつでも歴史に触れられるということも、リーダー意識の形成には有効なことと思われる。また、大学図書館の一角には、「世界女性文学センター」(Word Women's Literature Center) があり、韓国はもとより欧米や中国や日本（吉本ばななの作品が紹介されている）の女性作家の作品が展示・紹介されていたが、このような「場」も意識の啓発に寄与することだろう。



写真2 リーダーシップ研究所ホール 中央が Chang 所長、右手には Servant Leadership とのタイトルで韓国の歴史的リーダーの画像が並ぶ。写真3 2010年の私の名刺



写真4 ハーヴァード大学との学生ディバートのポスター

<報告2>

5. 人間・環境学部食物栄養専攻

香西 みどり (生活科学部食物栄養学科)

食物栄養専攻は、人間・環境学部に設けられている。同学部は、家族・児童福祉学科と人間環境学科のふたつの学科からなり、後者は、被服専攻と食物栄養専攻のふたつの専攻が設けられている。同専攻の Kim Hyun-Sook 教授から説明をいただいた。名刺には生涯教育校校長という肩書きもついていた。

【食物栄養専攻について】

食物栄養専攻は、1969年に家政学科より設立され、1972年より修士課程、1983年より博

士課程が設けられた。学部の卒業生は管理栄養士の国家試験受験資格が得られ、また成績優秀者は小、中、高校の教員免許を取得でき、さらに国家公務員試験も受験できる。

【教育の目的】

食物栄養分野における専門家を社会に輩出すること。食物栄養の基礎科学に焦点をあて、さらにその応用を通して生涯にわたって健康と幸福を維持できるようにする。学習プログラムは多様化する食物や栄養、公共の場での食事サービスなどに対応している。

【単位】

卒業に必要な単位は、教養科目では必修 14 単位、選択 20 単位の計 34 単位以上、専門科目では基礎科目 6 単位、選択科目 36 単位以上の計 42 単位以上、教養科目と専門科目をあわせて 140 単位以上である。専門科目に必修単位がないのは、政府が決めたオープンシステムをとっており、入学時は学科に分かれておらず、学部の 2 年か 3 年で専攻を決めるようになっているためである。Double major なので 2 つの専攻をとることができ、またより深くその専攻を学ぶ(depth course)こともできる。臨地実習など特殊な専門科目が多い食物栄養専攻を他学科の学生が第 2 専攻（副専攻）でとれるかどうかをきいたところ、問題ないとのことだった。実際に生物とか英語を専攻している学生が食物も専攻して、管理栄養士の試験を受け合格した学生もいるという。毎年 10~20 人が第 2 専攻で食物を選ぶが、その場合は食物の科目が 52 単位以上必要になる。入学 1,2 年後に専攻を決めるオープンシステムは 10 年前から行っており、オープンシステムの前後で学生が変わったかどうかきいたところ、基本的にはほとんど変わっていない、ただ去っていく学生もいれば、入ってくる学生もいるので一種のサバイバルのような状態という答えだった。



写真 5 食物栄養専攻の実験室



写真 6 韓国食博物館での調理実習

【カリキュラム】

講義 3 単位は授業 3 時間ということで、1 週間に 2 回か 3 回その授業がある。カリキュラムはグループ A, B, C というように科目ごとにグループが決まっています、たとえばグループ A は月曜と水曜に授業があるというルールになっていた。実験・実習は講義 2 時間、実験 2 時間で構成され、両方受けて 3 単位であった。

【進路】

学科の定員は 50 名で、学部の卒業生の約 10% が修士課程に進み、修士課程の半分が内部

進学、半分が外部からの進学である。卒業直前に管理栄養士の国家試験があり、就職する学生の半分以上が管理栄養士として働くということだった。管理栄養士以外の働き方としては、食品会社、研究機関、政府関係などがある。

5. 入学試験の競争率

年に数回あるので全体的な競争率は10倍程度であるが、一般入試では2、3倍である。

【感想、その他】

1. 当該専攻の訪問の前に、リーダーシップ・プログラムの様々な内容が紹介され、本プログラムが目指す **gentle power** (外見は女性らしく柔らかいが、内に鉄のような強いものを秘めた力という意味の説明があった) をもった女性リーダーを育てようという意欲が強く感じられた。特に2020年に自分がなりたい職業についてそのビジネスカードを学生に作らせたり、ミッションステートメントを書かせたりし、それらを廊下の壁に掲示することで学生が目標を確認できると同時に、具体的な行動指標となるように考えられている。ちなみにハングル語で書かれた一番短いミッションステートメントは「韓国の人々に喜びを与える」という内容で、学生がみている方向が高い所にあると感じた。
2. 政府からの指示で大学がオープンシステムをとっており、入学時には全学生が学科は決まっておらず、1年か2年後に2つの専攻を決めるという方式を10年前からとっていた。食物学科でも2年次から入ってくる学生が毎年10-20人おり、文系からも食物に入る学生がいるということで、カリキュラム構成から編入を行っていない本学の食物栄養学科とは事情が異なっていた。
3. リーダーシップ・プログラム、食物栄養、物理学の説明はすべて女性教員(卒業生でもある)からきき、非常にエネルギッシュで淑明女子大学を誇りに思っている様子を感じられた。教員のうち卒業生教員が25%ということで、多分説明してくださった教員は卒業生と思われるが、特に前二者の先生は学生をよく教育しているという自負をもっていることが伝わってきた。
4. 図書館が立派で、広い自習室の他にパソコン100台以上のパソコン室があり、Eラーニングが自由にできるようになっていた。さらに地下に24時間オープン自習室があり、毎晩多くの学生が遅くまで勉強し、中には朝までいる学生もいるということで、いろいろな意味でスケールが大きいと感じた。

<報告3>

6. 理学部物理学専攻

曹 基哲 (理学部物理学科)

2009年3月20日、韓国・ソウルの淑明女子大学校を訪問し、同日午後、理学部 (College of Science) ・自然科学科 (Division of Natural Science) の物理学専攻 (Major in Physics) を訪ねた。以下に訪問の際に受けた説明、感想等についてまとめる。

当日の我々の訪問には、物理学科のイム・ヘイン教授(Prof. Yim Hae-In)が対応して下さり、同氏の研究室(アモルファス金属及び磁性素子の物性実験)および学生実験室(当日は電気回路実験の準備中)を見学した。説明はイム教授および同教授の研究室に所属する大学院生より受けた。

【理学部の組織】

理学部は2つの「系列」—自然系列、芸・体能系列—を持ち、自然系列は4つの学科(自然科学・生命科学・数学統計・情報科学)、芸・体能系列は2つの学科(体育教育 Physical education・舞踊 Dance)を持つ。自然科学科には、物理学と化学のふたつの専攻プログラムがある。

【物理学専攻の構成】

物理学専攻のスタッフは教授5名で構成され、うち女性スタッフはイム教授一名である。

(参考:化学専攻は教授7名、うち女性教授1名。同大学ウェブページ参照)

同大学では、学生は入学の時点では専攻を決めていない。物理学専攻の場合、自然科学科入学生約70名のうち、後に物理学を選択する者は約10名前後であり、学生数の低下に学科として頭を悩ませている。女子学生の傾向として物理よりは化学を志望する割合が元々多い、ということ、卒業後、化学専攻の方が就職しやすそうに見える点などが理由と考えられている。現在の物理学専攻の学生数(1学年10名前後)を20名程度まで増やすことを目標に、今後テコ入れを検討している、とのことである。

【教育課程】

開講科目群については、標準的な講義・実験科目が開講されている他に、「オープン・ラボ」「インターンシップ・プログラム」「学部生向け学術講演」が学科独自に企画されている。

・オープン・ラボ:物理学科所有の教育用実験機器を講義・実験の授業時間以外にも使用できるように、実験室を開放している。

・インターンシップ・プログラム:2年生以上の学生は各教授の研究室にインターンとして所属し、指導を受けながら研究活動に参加することができる。(当日、実験室を案内してくれた大学院生はこのプログラムにより早期から実験に参加しているとのこと)

・学部学生向け学術講演:物理学及び周辺分野の最新動向を学部低学年向けに解説・講演する企画。

【感想、その他】

1. 実験室を案内してくれた2名の大学院生は、専門的な内容および英語による説明、物怖じもせず、よくトレーニングされている、という印象を受けた。(本人の個性か、それともリーダーシップ教育の成果かは不明。)

2. 学科所属学生が10名前後というのは全学の規模、化学科とのバランスから見て少なすぎると思われる。学生同士で刺激しあう機会が少ない、所有する実験機材が有効に活用されない、等の問題がある。入学時に学科に定員を設けない(専攻 major を2年次以降に決め

る)、という制度の負の側面であると思われる。

3. 研究設備維持のための資金手当では、学生実験用機器については大学から優先的に配分され、一方でラボの設備については大学からのサポートは必要経費の半額、残りは競争的資金、企業からの寄付等により賄っている。(基本的に日本と同じ)

4. 実験を行うに際しての安全面の確保については、注意を促す掲示(実験室ドア)と、「十分に気をつけて行う」という程度に留まっている。事故が起きたときの対処について、システム化はされていない模様。(本学では学科内緊急時連絡先一覧を作成し、実験室もしくは事務室に保管している)

5. カリキュラム内容について、基本的に必修科目をおかず、選択科目のみとなっているが、これに対する教員側、学生側の満足度について、当日に聞くことができなかった(質問しなかった)ことが反省事項。



写真7 放射線実験設備の説明をする大学院生



写真8 物理学専攻イム先生

<報告4>

三浦 徹

総評

わずか一日の訪問調査であったが、8月の事前訪問のうちに分厚い大学カリキュラムの冊子をうけとって予習ができたこともあり、また国際交流室 Office of Eternal Affairs and Development の渉外担当 Choi Soyoung さんの手際のよいアレンジのおかげで、関連の部署を効率よく回ることができた。各部署への案内は、「学生大使」となづけられた日本語が話せる学生が随行してくれた。我々にとって直に学生と日本語で話ができ、また学生にとっても賓客を案内するという張り合いのある仕事のように、良くできたシステムだと感心した。また建物内のエレベーターには、テレビモニターが設置され、学内情報がビデオで流れている。お茶大でもさまざまなイベントの広報には頭を悩ませていて、学内の建物の入り口やホールや果てはエレベーターにポスターを貼りにまわっているわけだが、淑明のスマートな広報媒体に驚かされ、広報室員でもある曹先生はさっそく検討したいといっていた。

今回の訪問調査の主眼は、リーダーシップ養成プログラムと、複数専攻選択履修制度のカリキュラムや学生の履修状況を知ることであった。後者については、訪問した専攻によって、こうした選択履修制度への反応が微妙にちがひ、温度差が感じられたことが興味深

かった。最初に訪れた食物栄養専攻の主任は、「オープンなシステムをとることでうまくいっている」ことを強調していた。副専攻としても十分食物栄養のカリキュラムを履修できるし、食物栄養（主）と経営学（副）という履修形態は卒業後の進路開拓につながる、あるいは、学部で生物学、大学院で食物栄養という進路もオーケー、とすべて前向きに述べた。これに対して、物理学専攻では、学生が化学専攻にながれ、勉強も就職も大変な物理学に挑む女子学生が少ないことを嘆いていた。

昼食のときにお会いした日本学専攻の先生は、複数専攻履修制度について、「企業サイドも2つも専攻できるのか、虻蜂取らずで役にたたないといっている」「人気のある専攻に集中し、仏文学、独文学などに学生が来なくなっている」「日本学専攻の場合も主専攻生、副専攻生がそれぞれ160-180名くらいずついて（2-4年生）、学生の名簿もなく、こまめな指導はできない」といったマイナス面をむしろ強調していた。卒業論文を書く学生は1/3程度で、残りの2/3は資格試験によって振替えているという。全体として、現行のカリキュラムの時間数では言葉や文化を深く学ぶことは難しいというトーンであった。

複数専攻選択履修を実施すると、時間割編成が難しくなるわけであるが、この点については、ほとんどの専攻が必修科目を設けていないため、学生は自分の希望する専攻の必要単位数を満たすことで専攻履修が認定されるので、時間割のうえで履修できる科目を選択すればよく、大学サイドで専攻をこえた授業科目のバッティングをあまり気にする必要はないことになる。他方、セメスター制を実施しているため、ひとつの科目で週2-3回の授業があり、科目同士のバッティングをさけるため、いくつかの決まった開講パターンがつくられていて、教員はそのなかから選ぶことになる。ちなみに、時間割は、すべて50分授業で朝8時から18時まで、10個の時限が設けられている（昼休みはない）。授業運営では、IT化が進んでいるようで、語学など教材（プリント）はウェブサイトに教員がアップし、学生はそれをプリントして授業にもってくるのが当たり前だという。

学生自身が、複数の専攻選択ができることやリーダーシップ養成というスローガンをどのように受け止めているのか、を知りたいところであったが、次回の宿題としたい。

韓国食物博物館では、伝統料理についての常設展示とともに、小学生向けの料理と食育の実習室が設けられていた。お茶大でも、附属校園を舞台に食育プロジェクトが進行中であるが、同じような動きがグローバルに進んでいることを感じた。昨年秋に就任した Han Young—Sil 学長は、食物栄養学の研究者で50歳前後の若さだという。食物栄養学専攻は教員5人で、このような小所帯からも学長が選出されるあたりに、「世界を変える」には自分をまず変えるという息吹が感じられた。他方で、8月の予備調査のときには、国際交流室長 Kim Hyung-Kook 先生が、「土用には韓国ではサムゲタン（参鶏湯）をたべます、古くからの店があるのでそこで昼食にしましょう」と車で連れていってくれた。店の前にすでに行列ができていたがスタッフのひとりが並んで番をとっていただけのおかげで店に入り、あつあつの鶏粥をふうふう言いながらご馳走になった。このような気取らない暖か味を感じさせる大学でもある。



写真9 図書館 写真10 図書館で、授業ビデオ録画を使って学習できる



写真11 エレベーター内の学内広報モニター



写真12 大学歴史館展示 未来にはばたく淑明女子大学